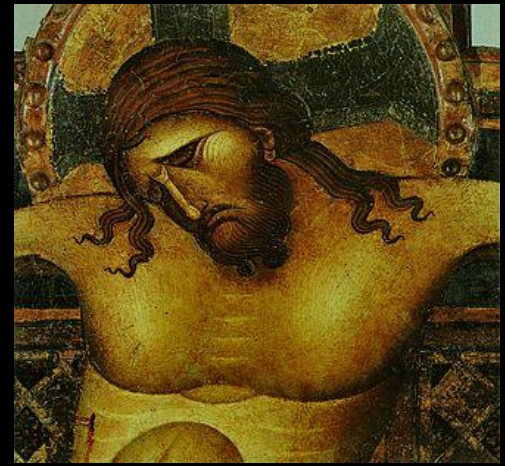


# 17世紀ローマと ボローニャ派の画家たち

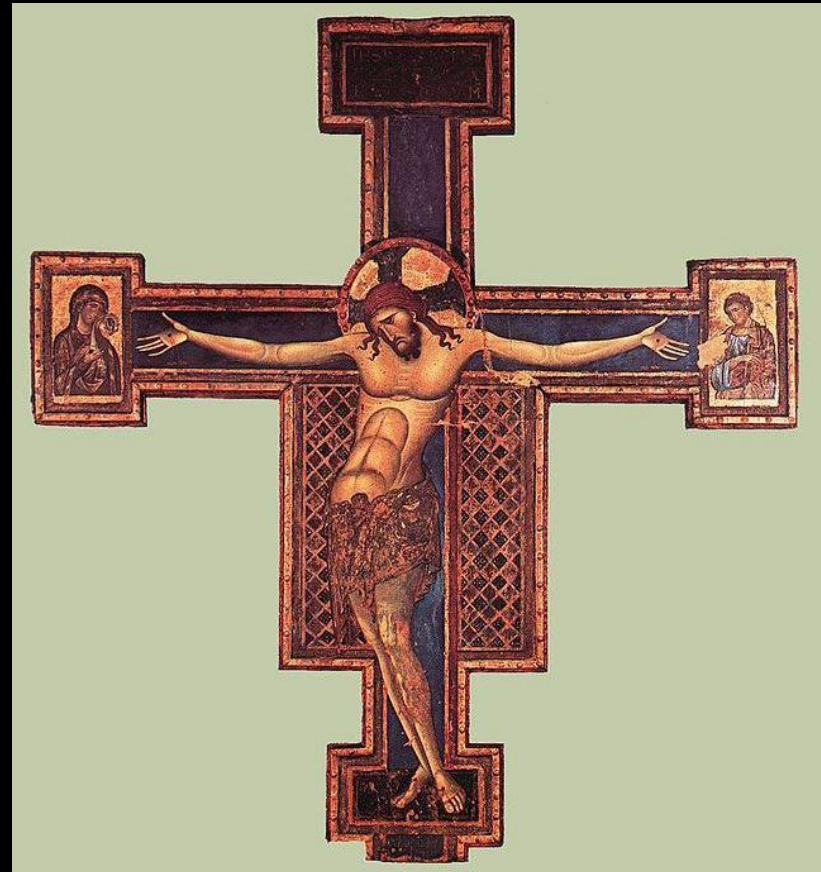
2014年12月20日  
静岡文化芸術大学  
小針由紀隆







サン・ドメニコ聖堂とジ  
ュンタ・ピサーノの  
十字架板絵





聖ドメニコの石棺





ニッコロ・デッラルカ《死せるキリストへの哀悼》  
サン・マリア・デッラ・ヴィータ聖堂のためのテラコッタ群像彫刻







ジュゼッペ・マリア・クレスピ

# ボローニャ派とは

- ・16世紀末から17世紀前半にかけて、ボローニャのカラッチ一族のアカデミア(1582設立)に学び、ローマでも活動した一群の画家たち。
- ・レーニ, アルバーニ, ランフランコ, ドメニキーノらは、アンニーバレ・カラッチに倣って、1600年頃からローマの教会や宮殿をフレスコ画で装飾。宗教画、神話画、風俗画、風景画も制作。
- ・1609年のアンニーバレ没後も、ローマにおいて有力画派となった。



# ボローニャ派の画家たち

バルトロメオ・パッサロッティ

ルドヴィコ・カラッチ ●

アゴスティーノ・カラッチ ●

アンニーバレ・カラッチ ●

グイド・レーニ

フランチェスコ・アルバーニ

ドメニキーノ

ジョヴァンニ・ランフランコ

グエルチャーノ

シスト・バダロッキョ

# 三人のカラッチ

ルドヴィーコ・カラッチ（従兄）

1555-1619

アゴスティーノ・カラッチ（兄）

1557-1602

アンニーバレ・カラッチ

1560-1609





アンニーバレ、アゴスティーノ、ルドヴィーコ

# アカデミア・デリ・インカミナーティ Accademia degli Incamminati

1582年にボローニャで創設。

当初Accademia del Naturale、その後  
Accademia dei Desiderosi あるいは  
Accademia dei Carracci と呼ばれた。

私設の画学校で、自然にもとづく学習を  
主唱し、反宗教改革時に禁止されていた  
裸体のモデルを使った訓練も行った。



バルトロメオ・パッサロッティ《肉屋》  
(1525-1526)







ピーテル・アールツェン  
《肉屋》  
(1508--1575)





ヴィンチェンツォ・カンピ  
(1539-1541)  
《チーズを食べる人々》





ヴィンチエッソ・カンピ  
《果物売りの少女》

# アンニーバレのローマ招聘

- 1583年、制作年代のわかる最初の作品、《キリストの磔刑》を制作。
- 1595年、オドアルド・ファルネーゼ枢機卿によって、ローマに招かれる。
- 1600年、ファルネーゼ宮殿のギャラリー天井画を完成。

# 1590年代生まれの芸術家

ニコラ・プッサン 1594-1665

ピエートロ・ダ・コルトーナ 1596-1669

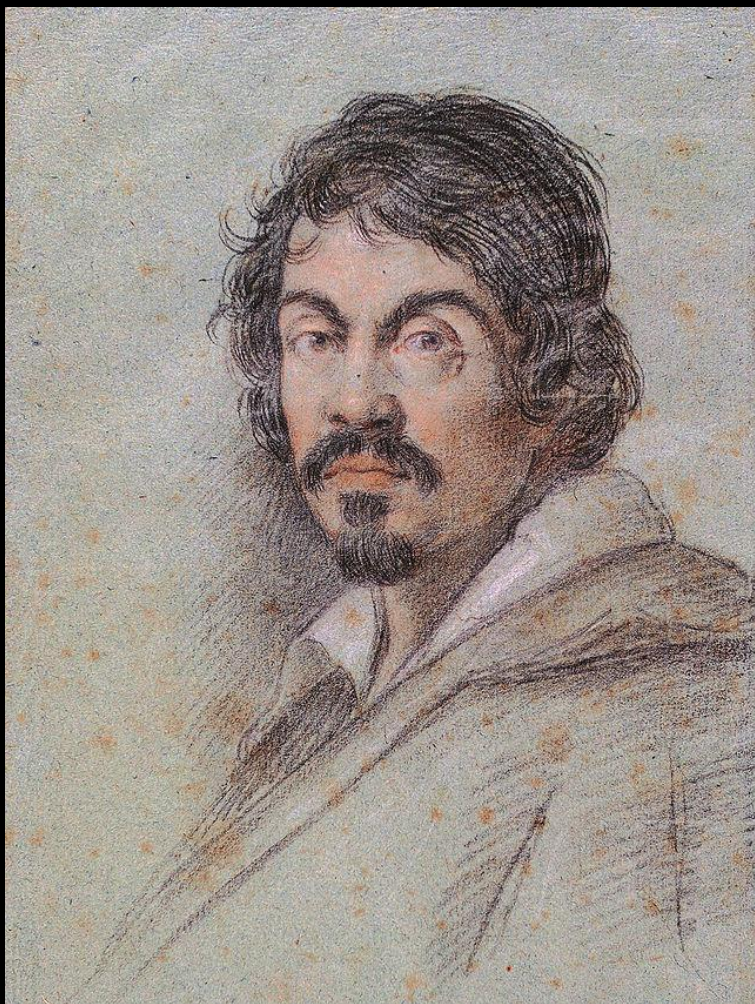
ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ 1598-1680

フランチェスコ・ボッロミーニ 1599-1667

ヴァン・ダイク 1599-1641



1600年前後のローマ

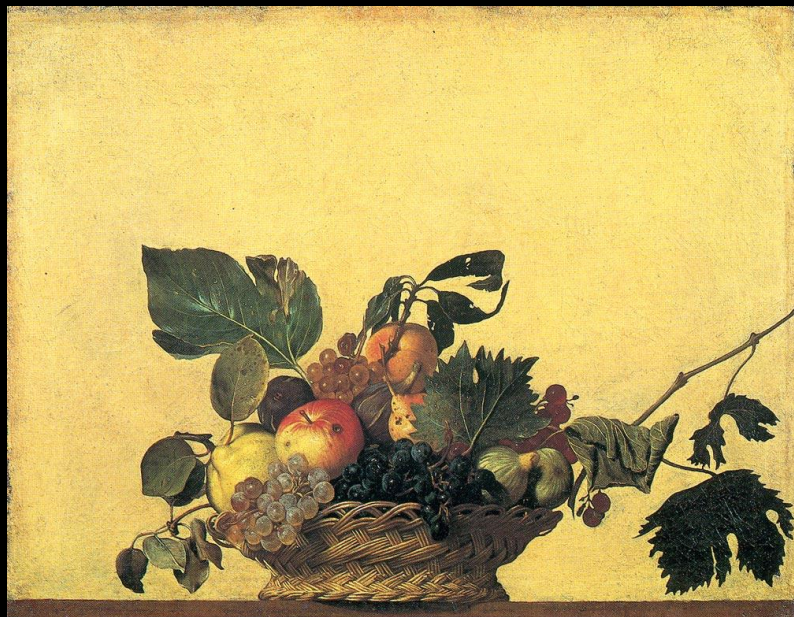


ミケランジェロ・メリージ・ダ・カラヴァッジョ (1570-1610)



サン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂  
コンタレッリ礼拝堂









カラヴァッジェスキ

# パラッツォ・ ファルネーゼ (ローマ)

枢機卿アレッサンドロ・ファ  
ルネーゼの命により建設。  
サンガッロが設計、ミケラン  
ジェロも関与し、16世紀半ば  
に完成。  
現在はフランス大使館。



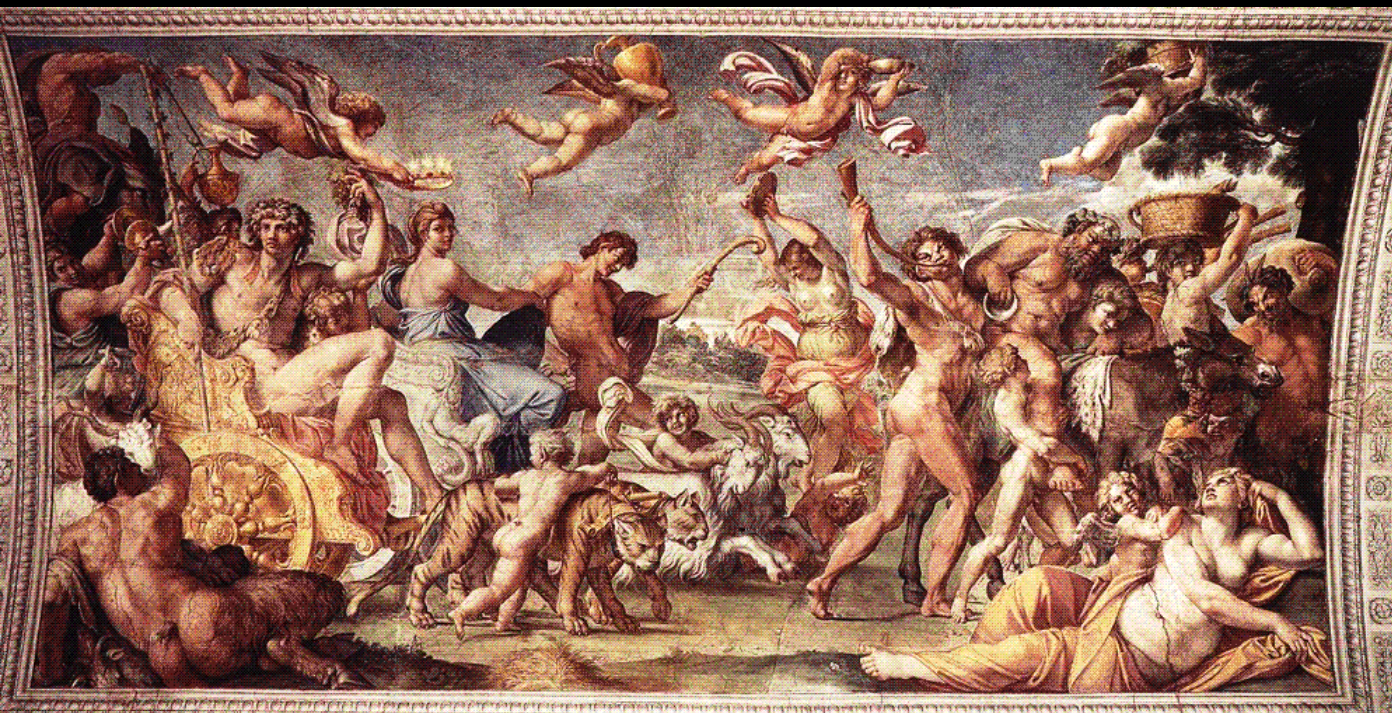




アンニーバレ・カラッチ  
パラッツォ・ファルネーゼの  
フレスコ画装飾



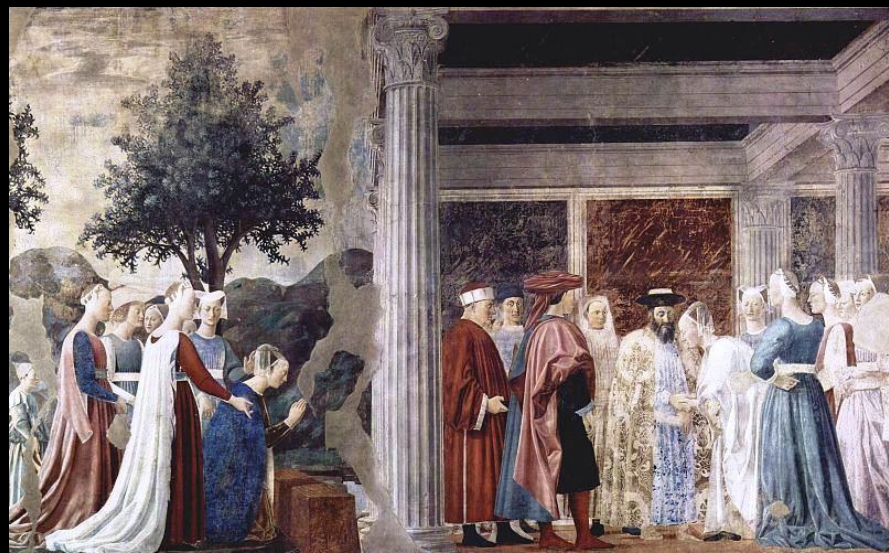




アンニーバレ・カラッチ △  
《バッカスとアリアドネの凱旋》







フレスコ画：イタリアにおける巨匠の条件





化粧するヴィーナス



分かれ道のヘラクレス



アンニーバレ・カラッチの素描









# 絵画の救世主としてのアンニーバレ

マニエリスムの画家たちの技巧や奇想に走った様式とも、カラヴァッジョの冷徹な写実に徹した様式とも一線を画していた。「マニエラ」と「ナトゥーラ」との調和が取れた様式を確立し、墮落したイタリア絵画を救済した。

\* こうした見方はどこから？



G.P.ベッローリ  
『近代画家列伝』1672, ローマ

Giovanni Pietro Bellori, *Le vite de'  
pittori, scultori et architetti moderni*,  
Roma, 1672.

「目で見たままに事物を描くカラヴァッジョと、自然を顧みず自分の考えだけで描くジュゼッペ・ダルピーノの両者が評判をとっていた。こうして絵画が終焉を迎えつつあった時、恵深い星がイタリアに向かい、神意にもかなって、学問研究の先端であるボローニャに極めて優れた才能の持ち主が現れて、墮落しほとんど絶えかけていた絵画芸術が生き返った。この才能の持ち主こそアンニーバレ・カラッチであった。」（ベッローリ）



# ベッローリによるアンニーバレ評価

- ・カラッチー族の中で、アンニーバレが最も優れている。
- ・ローマにおけるアンニーバレの活動こそが、カラッチー族の絵画革新の達成である。



パラッツォ・ファルネーゼのギャラリー天井画を指している。

C.C.マルヴァジーア  
『ボローニャ画家列伝』1678年

Carlo Cesare Malvasia, *Felsina  
pittrice*, 1841 (1678)

# マルヴァジーアのカラッチ論

「(ルドヴィーコ・カラッチは) 年を重ねた後でしかローマに行かなかった。ローマの「彫刻風の硬い表現は彼の素質に合わなかったが、学識に欠けるロンバルディアの素朴さも同様であった。そこで彼は双方の良いところを取り入れはしたが、どちらでもない混合表現を模索した」 のだった。



カラッチ一族の成功は、ボローニャを拠点にした最年長のルドヴィーコの尽力によるものだった。



# *Felsina* の用語選択

紀元前7世紀から紀元前6世紀にかけて、エトルリアの影響が及び、住民もウンブリ人 (Umbri) からエトルリア人に移り変わった。

エトルリア人の時代に、町はフェルシナ (ラテン語: Felsina) の名で呼ばれた。

→ ボローニャ人であることの自負  
ローマへの対抗意識

# 歴代ローマ教皇

クレメンス8世 (1592-1605)

レオ11世 (1605-1605)

パウルス5世 (1605-1621)

グレゴリウス15世 (1621-1623) ●

ウルバヌス8世 (1623-1644)

イノケンティウス10世 (1644-1655)



- ・ローマにおけるアンニーバレの成功によって、ひとつの地方流派であったボローニャ派は、ヨーロッパ中で注目されるようになる。
- ・しかし、その一方で、ボローニャ派の画家たちの間で、嫉妬による相互嫌悪の感情が、いよいよ強くなっていく。



一枚岩になれないボローニャ派





## 1621-23年、ローマ滞在





レーニ ↑

グエルチーノ

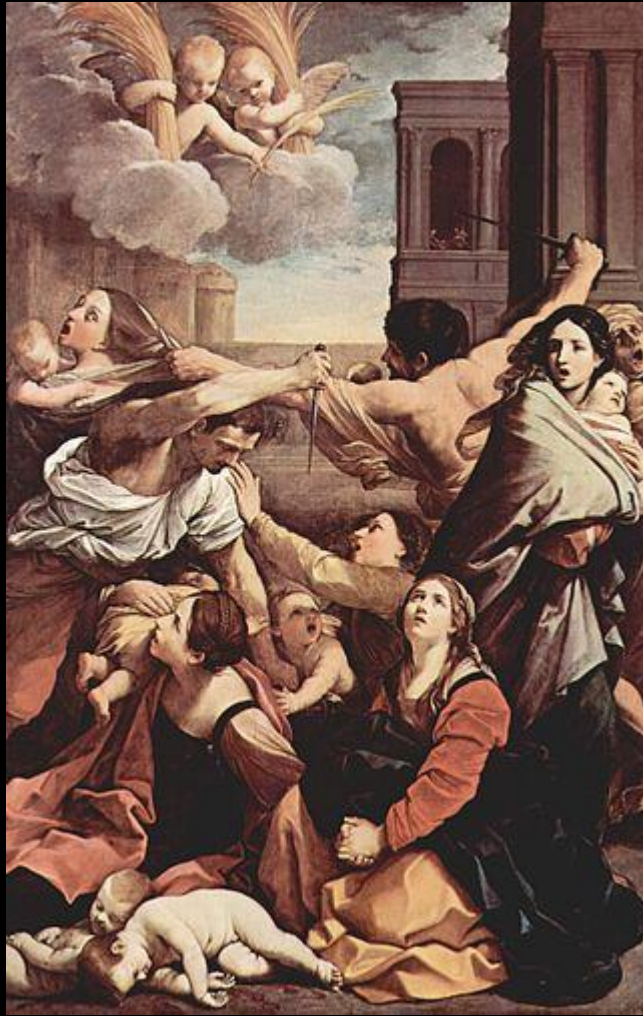
→





(2461-5751)  
グイド・レー





嬰兒虐殺



アタランテとヒッポメネス

## グイド・レーニとアルバーニの対立

「... グイドの方が先輩だったこともあって、彼の作品はすでにかなりの名声を博し、アルバーニよりも尊敬と敬意をもって迎えられていた。そのためアルバーニは、大きな嫉妬心を燃やしていた。また、レーニ自身が大成をしたことを意識し、アルバーニに対する態度も尊大となり、軽蔑的であったので、ますます嫉妬心が強くなった。...」 （マルヴァジア）



「... 時が経つにつれて、両者の敵意は公然のものとなり、しかもますます強くなっていったので、ボローニャの町には二つの大きな党派ができてしまった。そして、それぞれの党派の賞賛者も巻き込み、一方は自らアルバーニ派と呼び、他方はグイド派と称した。両派とも自分たちのアイドルを褒め、相手をけなす噂話や中傷や作り話をすることに明け暮れた。...」

（バルディヌッチ）

# アンニーバレの嘆き

「... アゴスティーノが学者ぶることは鼻持ちなりません。彼は私が制作したものにケチをつけ、いつも何らかの欠点を見つけ、私が制作したものをことごとく傷つけ壊してしまおうのです。それに彼は、詩人や作家や宮廷人を、ひっきりなしに足場の上まで案内してくるので、私は邪魔されて仕事に身が入りません。...」(マルヴァジーア)

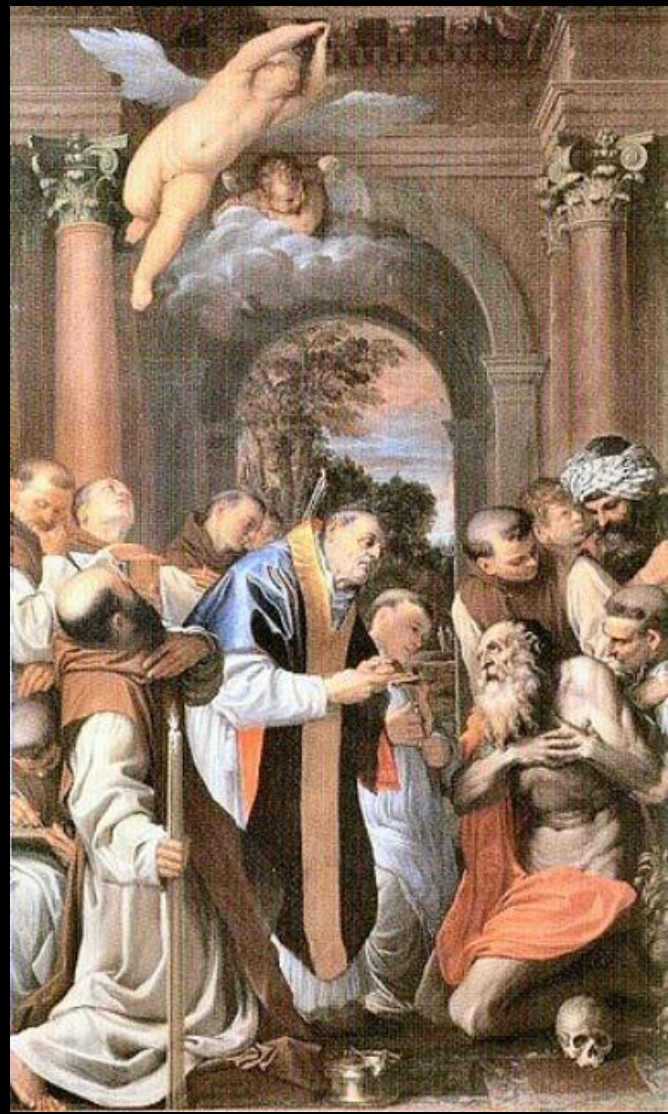
# ドメニキーノの剽窃

1614年にドメニキーノは、サン・ジローラモ・デッラ・カリタ聖堂のために、《聖ヒエロニムスの最終聖体拝領》(ヴァチカン絵画館)を制作。その直後、ランフランコは弟子を使って、アゴスティーノ・カラッチの同主題の絵から複製版画を制作・配布させ、ドメニキーノの剽窃行為をローマ市民に訴えた。





ドメニキーノ



アゴスティーノ・カラッチ

「原画」アゴスティーノ・カラッチ  
《聖ヒエロニムスの最終聖体拝領》





# ドメニキーノ× ランフランコ

ローマ、サンタン  
ドレア・デッラ・ヴ  
アツレ聖堂の内  
部装飾で、両者  
が競合。







## 聖アンデレの生涯







ナポリで脅迫されるよそ者



# ドメニキーノの ナポリ滞在

サン・ジェンナーロ礼拝堂の装飾







ナポリ大聖堂、サン・ジェンナーロ礼拝堂

# 脅迫に怯える1631年のドメニキーノ

「... 彼は敵意と羨望の苦しさを味わい始めた。  
。ナポリ滞在二日目の朝、彼は部屋を出るとき、鍵穴に差し込まれた脅迫状を見つけた。  
ローマにすぐに帰らなければ、お前の命は保証されない、という文面であった...」

(パッセリ)



# イタリアにおける地方間の反目

強烈な地方びいきcamparismo

自分の出生地paeseに対する偏愛

遠い国より、近くの敵対者に抱く深い恨み。

結語にかえて

# ボローニャ派の後世への遺産

—風景画への貢献—

絵画主題としての「エルミニアと羊飼い」  
に注目する



# 主題の文学的典拠： トルクアート・タッソ『エルサレム解放』

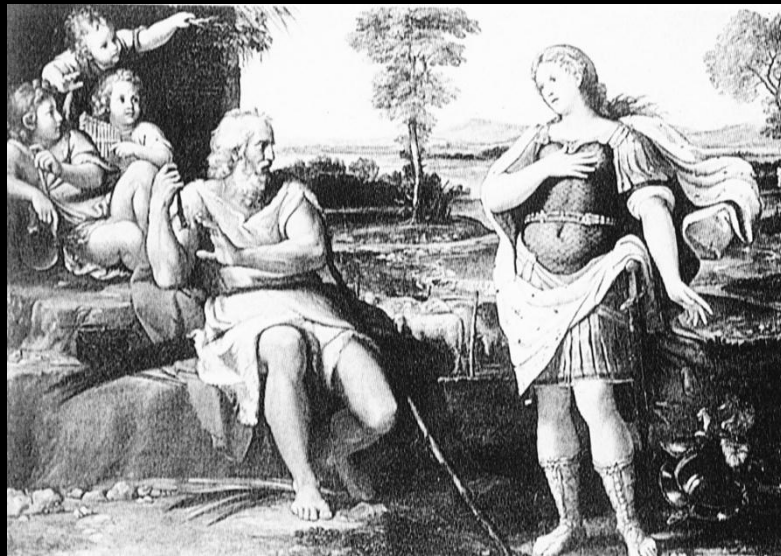
1099年、キリスト教十字軍がイスラム教徒軍を  
破り、エルサレムを奪回。

史実に基づいているが、天使と悪魔、妖艶な魔  
女、成就しない恋愛などを自由に交えている。  
なかでも、エルミニアとタンクレディの恋物語は  
おおいに人気を博した。

ルドヴィーコ・カラッチ《エルミニアと羊飼い》  
サン・イルデフォンソ、ラ・グラナハ王宮







アンニーバレ・カラッチ派



ゲルチーノ



ランフランコ



シスト・バダロッキオ





ドメニキーノ



フランチェスコ・アルバーニ



パウル・ブリル



クロード・ロラン

ボローニャ派の画家たちの間には、風景や人物の描写に、かなりの相違が見られる。

→ 風景に比して、人物が大きい小さいか。

同じ主題を描いた絵画でありながら、こうした相違が生じている点を、どのように説明したらよいのだろうか。

→ 理論家、G.B.アグッキ

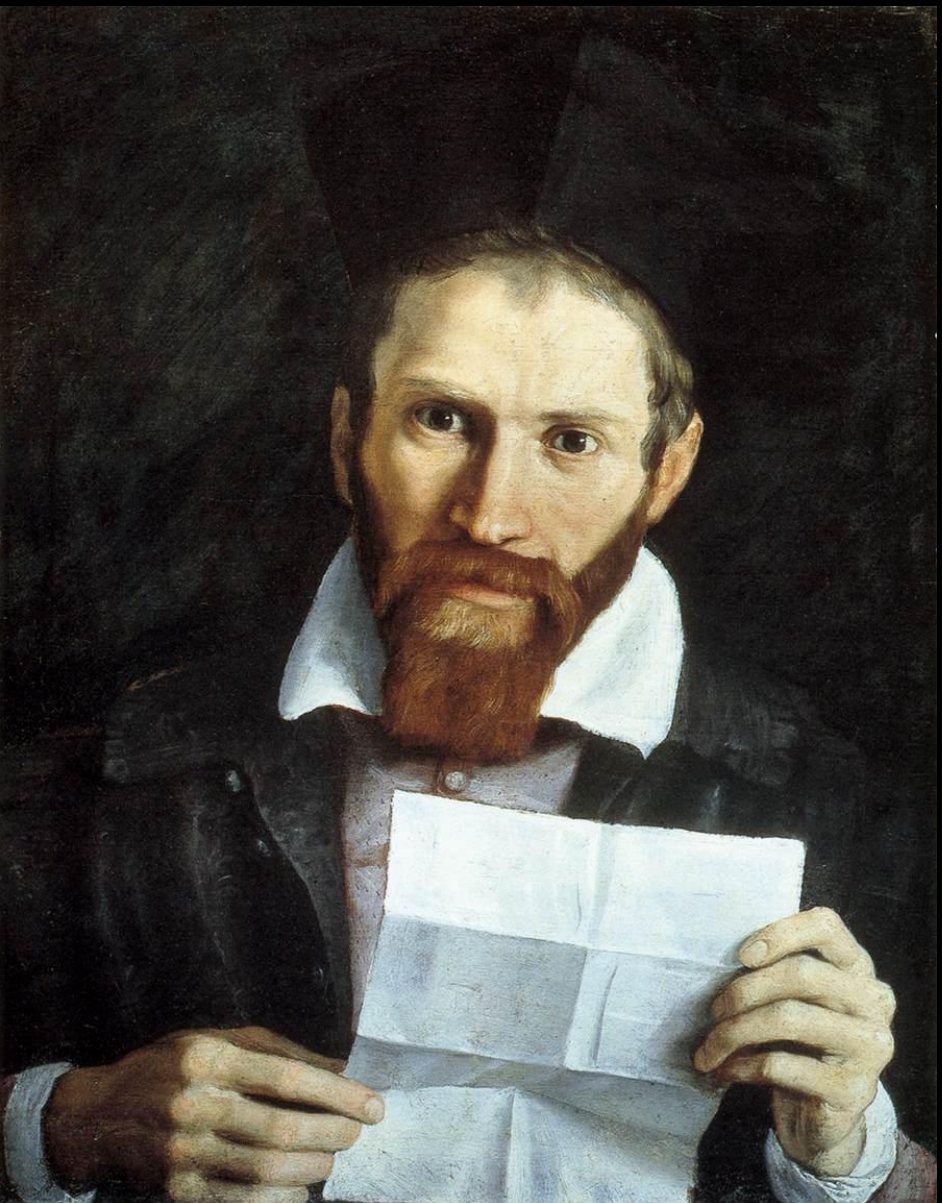


ドメニキーノ

《ジヨヴァンニ・バッティスタ・アグツキ  
の肖像》

1615-20年 ヨーク美術館

- ・ タツソの叙事詩の一節から、絵画
- ・ 制作のためのプログラムを作成





se pure la piacevolezza loro la comportava, et qualche dote per via  
volanti et appresentare in somma tutto il paese, come un luogo ri-  
posato della quiete, e felice Arcadia, et un giorno tranquillo della  
più bella stagione, et perche, i corpi di tutte le non potrebbero  
vivere se non piccioli a proposito della grandezza del campo,  
et delle

- ・ヨルダン川のほとりの風景は、「静かで幸福なアルカディア」のように。
- ・広大な山野に小さな人物を描くように。

# アグッキ・サークルの内と外

アンニーバレ・カラッチ

フランチェスコ・アルバーニ

ドメニキーノ

ピエトロ・ボンジ

ランフランコ

グエルチャーノ



アンニーバレ・カラッチ



ドメニキーノ



クロード・ロラン





ニコラ・プッサン



# 17世紀ローマから19世紀パリへ

- ・アグッキの見解は、古典的風景画の描き方を論じた最初にして、おそらく唯一のプログラム。

- ・アンニーバレ・カラッチ、ドメニキーノ、  
クロード・ロラン、プッサン



とりわけプッサンの風景画を権威づけていた  
19世紀フランスのアカデミーに受容される。





‘Et IN ARCADIA EGO’ (我もアルカディアにあり)





歴史風景画 Paysage historique

# 浮き沈みするボローニャ派の評価

17世紀～19世紀 / 高値安定

20世紀 / がっくり下落

20世紀最後の30年 / 再浮上